

高崎直道『如来蔵思想の形成』

水野弘元

観(三論宗)や瑜伽行(法相宗)の思想よりも高い立場のものとされて来た。

最近高崎直道博士によって、「インド大乘仏教思想研究」の副題のもとに『如来蔵思想の形成』という大著が出版された。これは如来蔵思想の集大成の書としての『宝性論』の成立を跡付けたものといふことができる。

インド大乘仏教思想としては、インド自体においては、中期大乘仏教思想として中観派と瑜伽行派の二つが代表的なものとされており、著述や論師にしてもこの二つの思想を中心として研究されて来た。しかし実際には、この二派以外に如来蔵(仏性)の思想が存在し、これはシナやチベットの仏教では中観派や瑜伽行派のほかに伝承され研究されている。ことにシナ仏教では、インドではまったく知られない『大乘起信論』を中心として、いわゆる法性宗の名において如来蔵思想は中

観(三論宗)や瑜伽行(法相宗)の思想より

も高い立場のものとされて来た。

如来蔵や仏性に関するインド仏教文献としては、もっとも重要なものとして『宝性論』がある。本書は今から四十年ほど前にそのチベット訳が学会に紹介され、わが国でも漢訳の『究竟一乘宝性論』や『仏性論』『法界無差別論』などが相互に関係があるものとして注意され、さらに『宝性論』の梵文原典が発見され、二十余年前に出版されると、世界の学界は一層これに注意するようになった。日本でも梵本、チベット訳、漢訳のあらゆる資料によつて、その研究が活発に為されるようになった。

高崎氏もこの研究に従事し、二十余年の間に、如来蔵思想に関連した論文を発表することと二十数篇におよび(本書p.iii以下)、さらに梵文『宝性論』をチベット訳、漢訳等と参照し

て、英訳出版したのが八年前のことである。N. Takasaki: A Study on the Ratragotravibhāga (Uttarāntra) being a Treatise on the Tathāgatagarbha Theory of Mahāyāna Buddhism. ISMEO, Roma, 1966 (S. O. R. XXXIII)

本書によって著者はインドのプーナ大学から哲学博士の学位を授与された。本書は『宝性論』を英訳しただけでなく、研究論文として、『宝性論』の構造と内容、如来蔵思想の成立発達、『宝性論』と同時代に成立した『大乘法界無差別論』『仏性論』『無上依経』『楞伽経』『大乘起信論』に関する考察、大乘仏教における『宝性論』の地位等に関する詳細な論文が掲げられ、また梵・蔵・漢の『宝性論』の梗概や引用文献の指示等がなされている。

右の英文は『宝性論』を中心とした研究であるが、ここに紹介する本書は、右の英文研究をふまえ、また今日までの『宝性論』や如来蔵思想に関する内外の研究を紹介批判することによって、これを一層発展させ、『宝性論』における如来蔵思想がいかに成立展開発達して行ったかを考察したものである。

因みに『宝性論』は頌と釈偈と長行釈とから成り、頌は弥勒の作であるとされ、『大乘莊

『厳経論頌』、『現観莊嚴論頌』、『中辺分別論頌』、『金剛般若経論頌』、『法法性分別論』等とともに弥勒作の五部または六部の一とされている。『宝性論』の注釈部分は四世紀末―五世紀初め頃、世親とほぼ同時代に在世したと考えられる堅慧 Saranati の作とされる。

二

さて本書の構造は主要部分が序論、第一篇、第二篇、結論から成り、序論には、1 如来蔵思想の定義、2 本研究の目的・方法・範囲、3 如来蔵の基本構造が論ぜられている。

1 如来蔵思想の定義では、まず如来蔵思想が近代においていかに研究されて来たかを紹介し、次に如来蔵思想を定義して『宝性論』がその目的をもって書かれたところの所釈の教理内容をさす名である」(p.9)とし、『宝性論』の所説そのものが如来蔵思想であるとしながら、『宝性論』の研究はそれだけでは不十分であつて、そこに引用されている諸経論に遡って検討する必要があるとしている。その引用経論には、原始仏教に直接基づくものから、『宝性論』とほぼ同時代と考えられる『大乘莊嚴経論』に至るまでの極めて多くのものがあつて、その思想内容は広汎にわた

っている。

例えば「心性本浄、客塵煩惱」の説は原始仏教まで遡り、如来蔵の別名としての仏性は『大乘涅槃経』に説かれ、これを如来蔵として説いているのは『如来蔵経』や『勝鬘経』『楞伽経』等である。これらの經典の所説から、如来蔵思想とは「一切衆生に如来蔵、すなわち如来たるべき因があるという説」(p.12)と、いうことになる。如来蔵説は以前の多くの經典に「一切は空である」と説かれたのに対して、「如来蔵が有る」という有説として空説に対比される。

2 本研究の目的・方法・範囲 如来蔵思想の研究は、現在の段階では如来蔵思想とは何かということの内容上および歴史的に規定することである。次に『宝性論』に至る如来蔵思想の形成については、その資料となつたと考えられるものを全面的に精査する必要があり、これに関して本研究では、

第一に『宝性論』所引の経論の如来蔵説を全体的関連において個々に検討する。第二に『宝性論』に引用されていない経論の如来蔵関係の思想を検討する。以上の二点は如来蔵思想形成史をなすものであつて、本書の第一篇で取り扱われている。第三に『宝性論』に

引用の有無に拘らず、如来蔵思想の形成に重要な役割を果たしたものを検討する。これは如来蔵思想前史をなすもので、本書の第二篇で論究されている。

なお『宝性論』に関する限りでは、如来蔵思想は唯識思想と無関係に論ぜられているが、如来蔵思想を全面的に研究するためには、それと密接に関係している唯識思想にも触れなければならぬが、問題が複雑となるため、本書では唯識思想との関連は割愛されている。ただ本書に後付されている「如来蔵関係諸概念展開表」には、唯識関係の文献として『大乘阿毘達磨磨經』、『瑜伽師地論本地分』、『大乘莊嚴経論』、『現観莊嚴論』、『撰大乘論世親釈真諦訳』等が掲げられている。

3 如来蔵説の基本構造としては『宝性論』の構造が紹介されている。ここには如来蔵に関する重要な問題が網羅されているからである。

まず『宝性論』は仏、法、僧、界、菩提、功德、業の七部分、すなわち七金剛句から成っている。最初の三つは仏法僧の三宝であり、第四の界は性ともいい、三宝の原因を意味するから宝性 Ratna-gotra であつて、これが『宝性論』の名の由来である。ところが三宝

の中では仏が中心であるから、第四の界は仏性 buddha-dhātu と如来界 tathagata-dhātu 如来性 tathagata-gotra 如来蔵 tathagata-garba ともなる。ここに第四の界が仏性または如来蔵とされる。『宝性論』は七金剛句中の第四を中心として、後の四金剛句を研究の主題としている。

すなわち第四の界は有垢真如とされ、第五の菩提は無垢真如、第六の功德は仏功德、第七の業は如来の作業とされ、最後に信功德で本論が結ばれている。

四金剛句は宝性のもつ四つの側面であるが、中でも議論の中心は界としての如来蔵である。如来蔵については、如来蔵の三義、四方面からの解説、如来蔵の九喻等によって論ぜられている。このような複雑な如来蔵の説は、如来が世に出づるも出でざるも、永遠不變の真理であるが、極めて難解であって、十地の菩薩さえもその少分を知るのみとされ、一般大衆はこれを信受するより仕方がないとされる。

なお如来蔵の三義(法身、真如、如来性)中の第三の如来性の説明において、『大乘阿毘達磨経』の「無始時来界」云々という有名な偈が引用されているが、『宝性論』ではこの偈

を『勝鬘経』を教証とし、染淨依持の義を示すものとしている。唯識説ではこの界を阿頼耶識であるとするのに対して、『宝性論』では『勝鬘経』に従って如来蔵であるとしている。それが『楞伽経』では阿頼耶識と如来蔵を同一視し、『起信論』の如来蔵縁起説へと展開するのである。

最後に『宝性論』の構成と所依経論との一覧表が付せられている(p.30)が、これは著者の英訳に付せられているものより極めて簡略である。それにしても、『宝性論』の所依経論の主要なものは『勝鬘経』『如来蔵経』『不増不減経』であり、次いで『大集経』中の諸品『大乘莊嚴経論』『大乘阿毘達磨経』『華嚴経性起品』等とも関係が深いことが知られる。(序論終り)

三

第一篇 如来蔵思想の形成 四章から成る。第一章如来蔵系經典の三部経、第二章如来蔵と仏性、第三章如来蔵と種性、第四章如来蔵とアーラヤ識。

第一章では『宝性論』と直接関係のもっとも深い『如来蔵経』『不増不減経』『勝鬘経』を如来蔵系經典の三部経として取り扱っている。

この三経の成立順序は右列挙の順である。

第一節『如来蔵経』は如来蔵を主題とした經典で、『宝性論』が如来蔵説を展開するに当たって、最も基本的な典拠として用いたものである。『如来蔵経』には漢訳二種、チベット訳一種があり、梵本は残存しない。本経には如来蔵の三義としての法身、真如、如来性を三種自性として、九喻にあてはめて解説している。要するに『如来蔵経』の論説によって、衆生界のすべてにとって、無始時来の心の雑染法が客(一時的付着物)たること、無始時来の心の清浄法が俱生不可分であることが解明された。(p.40)一切衆生の身に如来智が滲透していることについては、『華嚴経』の「如来性起品」(『性起経』)を受けているとして、『宝性論』所引の『性起経』の文が訳出されている。さらに如来蔵の九喻と蔵 garbha の意味とその先行思想とを考察している。

第二節『不増不減経』では、まず『宝性論』と本経との関係を論じ、『不増不減経』はその題名の如く、「如来と衆生界とは一界であって増減なし」(p.69)とすることを主題とする短い經典で、菩提流支による漢訳のみが現存し、梵本もチベット訳も伝えられていない。

本経は同じく堅慧作とされる『大乘法界無差別論』にも二、三回引用され、『宝性論』には七種金剛句中の第四の界、第六の功德の説明において九回ほど引用されている。それは衆生界に関するものであって、これを表示すれば、

- 衆生界
- 1 衆生 (凡夫)
 - i 善淨……自性清淨心
 - ii 染汚……客塵煩惱
 - iii 存在……法性
 - 2 大智慧者 (菩薩)
 - 3 最勝の大智者 (如来)

となり、衆生凡夫中の i が相應の清淨法であって如来蔵の不空となり、ii が不相應の雜染法であって如来蔵の空となる。最後に広く界や法界の意味が検討されている。(p. 86f.)

第三節『勝鬘經』本経は『大乘涅槃經』とともに如来蔵系經典で最も有名なもの。本経は『宝性論』では狭義の如来蔵の説明に關してだけでなく、三宝論、菩薩論等の説明においても典拠とされている。本経には漢訳二種、チベット訳一種があり、梵本は残存しない。本経五章の中、最後の如来蔵章でとくに如来蔵が十義によって説明され、その第九に如来蔵が法界蔵、法身蔵、出世間蔵、自性清淨蔵等のいわゆる如来蔵の五義によつて説明さ

高崎直道『如来蔵思想の形成』(水野)

れている。ここに前の『不増不減經』に説かれない如来蔵染淨依持説が現われ、それが『楞伽經』に採用されて、如来蔵と阿頼耶識との同一視に進んでいる。

第二章「如来蔵と仏性」では、『涅槃經』の系統が取り扱われている。けだし如来蔵の同義語として仏性がある。仏性を主として論じている經典の代表的なものは『大乘涅槃經』であり、その他に『央掘魔羅經』『大法鼓經』『大薩遮尼乾子所説經』等がある。これらの『涅槃經』系統の諸経が本章で論ぜられている。

第一節『涅槃經』いわゆる大乘の『涅槃經』であつて、漢訳四種、チベット訳二種があり、梵文は断片以外には残存しない。この中で仏性を論ずるものとしては、漢訳では法顯訳の『大般泥洹經』六巻と、曇無讖訳の『大般涅槃經』四十巻中の最初の十巻と、チベット訳第二の Jīvanitra 訳がある。『宝性論』所引の梵文や現存梵本断片から推して、チベット訳第二の原本が『宝性論』が依用した『涅槃經』であると見なされる。

本経では如来常住の道理と一切衆生悉有仏性の説がその主題となっている。本経はその別名を「如来微密蔵」「秘密説」「密語」「如来蔵を説く經」等となっている。つまり『涅槃

經』も『如来蔵經』等と同じく「如来蔵の説示」を主眼とする如来蔵經典と見ることができるとにかく『涅槃經』本来の部分としての法顯訳『泥洹經』六巻は次の十八品から成っている。

- 1 序品、2 大身菩薩品、3 長者純陀品、4 哀歎品、5 長寿品、6 金剛身品、7 受持品、8 四法品、9 四依品、10 分別邪正品、11 四諦品、12 四倒品、13 如来性品、14 文字品、15 鳥喩品、16 月喩品、17 問菩薩品、18 随喜品がそれであつて、この中で13如来性品が仏性、如来蔵を説く中心であり、それ以前の諸品はその前提をなすものであり、以後の諸品にも如来常住や一切衆生悉有仏性を喩説している部分があり、また例えば17問菩薩品には a 一闡提論、b 『涅槃經』出現の意義、c 界の無差別性と差別相、という三つの点が論ぜられている。

如来蔵・仏性を主題としている13如来性品では如来蔵説が詳説されているが、如来蔵は外道のアートマン(自我)、プルシャ(神我)等ではなく、真実の我であるとする。この点で如来性品は真我品と名づけてもよい内容をもっている。その内容は、1アートマンとは

如来蔵、2界は帰依処、3入如来蔵義、4仏性難見、5王子の刀の喩、となっている。

(p.144)

この中、1に対しては種々の譬喩が説かれ、2に対しては仏界(仏宝)は法界(法宝)や衆生界(僧宝)と同じく、三宝帰依は仏宝への一帰依となること、仏の界(舍利)と塔廟とに帰依すべきこと、帰依すべき界(如来蔵、仏性)がわが身にあるから自身が帰依所となることが説かれている。3に対しては凡夫の四顛倒と法身の四徳とが苦・楽、常・無常、我・無我、浄・不浄として対応し、それが無二であり、二辺を離れた中道としての如来蔵を如来の秘密であるとして宣揚する。また無二の義が譬喩によって説かれ、本性不変の如来蔵が客塵煩惱によって変現することに因連して、このような如来蔵義を説く『涅槃經』が密語であるとする。4に対しては如来蔵、仏性が声聞や縁覚にとつては極めて難見であることを種々の譬喩で説いている。

『涅槃經』は如来(法身)と如来蔵の關係については十分な説明をしていないが、これは『如来蔵經』に説明があるために省略したものである。この点で『涅槃經』は『如来蔵經』を受けていると考えられる。また『勝鬘

經』が法身の名で、衆生のうちなる本質を説明したのに対して、『涅槃經』は法身にかえて界 dhātu なる語を取り上げ、この語によって諸仏の本質をも衆生の本質をも共通して示そうとし、これを仏性 buddhadhātu と呼んだ。これは衆生界を主題とする『不増不減經』より一歩進んだものであり、『勝鬘經』の説より新しい主張であると考えられる。この点から『涅槃經』は『如来蔵經』『不増不減經』『勝鬘經』という一連の如来蔵經よりも後の成立であると考えられる。

また『涅槃經』には如来が常住、堅固、不滅、寂滅等であるとされているが、これらの説明は雑然としており、『不増不減經』が法身の特質として常、恒、清涼、不変の四句を掲げているよりも幼稚な段階のように見えるが、他方では『涅槃經』では涅槃の八味として常住、堅固、不変、清涼(寂滅)の四句のほか不老、不死、無垢、快樂の四句を加えて整理している点もある。さらに法身の四徳としての常樂我淨の四波羅蜜は『涅槃經』では整理されていないのに『勝鬘經』では理路整然と整理されている。この点からすれば、『涅槃經』はある面では『勝鬘經』より早いものではないかとも考えられる。

これに対する著者の考えは次の如くである。新添を含まない本来の『涅槃經』(例えば六卷『泥洹經』)においても新古の層があつて、古層の『涅槃經』は『不増不減經』や『勝鬘經』等の如来蔵系經典より古いけれども、新しい層の『涅槃經』は如来蔵系經典の影響を受けて成立したものであろうとする。この新層『涅槃經』の後に『央掘魔羅經』『大法鼓經』『大薩遮尼乾子經』等の『涅槃經』系統の諸經が成立発達したとする。

第二節『央掘魔羅經』本經は『中阿含經』にある『アングリマーラ經』に大乘の如来蔵思想が加えられて改変増広されたものである。それはあたかも『長阿含經』中の小乘『涅槃經』に名を借りて大乘『涅槃經』が作製されたのに似ており、また次に考察される『大薩遮尼乾子經』もその名称だけは『中阿含經』にある『大薩遮經』『小薩遮經』に似ている。しかしこれは大小乗でまったく所説内容の異なるものである。

さて『央掘魔羅經』は漢訳とチベット訳に各一經があり、梵文原典は残存しない。本經における如来蔵關係の説としては、外道のアトマンに対して、仏教では真我としての如来蔵を説く。如来蔵は常住にして一切衆生に

存在し、不生、常住、不変、恒久、無病、無老死、不壞、不破、無垢であり、本性清淨であるとしている。本経は『勝鬘経』や『涅槃経』より多少おかれて成立したとされる。

第三節『大法鼓経』、第四節『大薩遮尼乾子所説経』この二経についてもその内容や説かれていた如来蔵思想等について詳しい紹介がなされている。これら諸経の成立順序については、著者によれば、『如来蔵経』↓『涅槃経』↓『大法鼓経』↓『央掘魔羅経』↓『大薩遮尼乾子経』とされている。(p.201)そして『涅槃経』系諸経に共通する記事としては、これらの経典が「正法の滅せんと欲する、余すこと八十年」に説かれたとしていること(これは正法五百年とすれば仏滅後四二〇年ということになる)、およびこれらの経典の多くは、仏教者たるものは鳥獣魚肉等の肉を決して食べてはならないとする断食肉が説かれていることである。断食肉の系譜としては、『楞伽経』の食肉品に「象掖と大雲と涅槃と央掘魔羅」とされており、また『文殊師利問経』には「象亀経、大雲経、(涅槃経)、指鬘経、楞伽経」として断食肉経を掲げている。これによって見ても、これらの諸経は同じ系統の経典であり、右に列挙されたような

順序で成立したものと考えられる。

因みに『楞伽経』は世親以後に現われたとも、世親以前に存在したともされ、今日では後説が支持されているから、『楞伽経』の成立は四世紀後半よりおそくはないことになり、これによって『涅槃経』系の諸経の成立はそれ以前であり、『如来蔵経』系の諸経はさらに遡ることになる。

四

第三章「如来蔵と種姓」ここでは前章に掲げられた諸経と多少の類似もあるが、とくに種姓 *gotra* に関して説いている『大雲経』『大乘十法経』の二経が取り扱われている。もともとこの二経相互の間には直接の関係はないようであるが、種姓を如来蔵との関係において説いている点が共通しているとされる。なお種姓は唯識系の諸経論でも取り扱われているが、唯識系の典籍は複雑多岐であるため、本書では割愛されている。

第一節『大雲経』には梵文原典は存在せず、チベット訳『大雲経』と曇無讖訳の『大方等無想経』が大体一致し、竺仏念訳の『大雲無想経』は断片的なものである。本経は如来の常住不変を説き、a 如来蔵、b 如来種姓、

c 不断仏種、d 常住不変を取り扱っている。それは『涅槃経』が如来常住無有変易、常樂我淨、一切衆生悉有仏性を説くのに似ている。しかしチベット訳には常樂我淨はなく、それは曇無讖が『涅槃経』から補ったものであろうと考えられる。さらに前述のように本経には断食肉も強調されている。これらの点から、本経は『涅槃経』と深い関係にあることが知られる。しかし『涅槃経』類が「正法滅尽、余八十年」とするのに対して、本経は「法垂欲滅、余四十年」として、本経が『涅槃経』類より多少後れて成立したことを思わせる。

しかし著者によれば、種々の点から見て、本経は『不増不減経』の説を受け、本経の後に『大法鼓経』や『涅槃経』が成立したであろうとする。(p.294 f.) 本経の成立は早くも二世紀後半であり、如来蔵思想の担い手がインドまたは南インドに出現したというのは、何らかの歴史的事実の反映らしく思われる。想像を加えることが許されるならば、リッチャヴィー族に属する一童子が本経や『大法鼓経』『涅槃経』等の実の作者ではあるまいかと著者はいう。(p.296)

第二節『大乘十法経』 本経には梵本はな

く、チベット訳は『大宝積経』第九会の『十法経』であり、これに相当する漢訳は仏陀扇多訳で『大宝積経』第九会の「大乘十法会」と僧伽婆羅訳『大乘十法経』とである。本経には如来蔵や種姓が関説されている。如来蔵については不老不死、無量無辺、不生不滅、不常不断のものとして説かれ、種姓については住種姓菩薩の十法が説かれている。これは『華嚴経』の「入法界品」や「十地品」の系統を引くものと考えられるが、本経には如来蔵や一闍提の語もあるから、本経の作者は『涅槃経』を知っていたかも知れない。

とにかく如来蔵思想の正系としては、『華嚴経』の「性起品」を受けて、如来蔵と法身の同一性を説く『如来蔵経』や『勝鬘経』等があり、傍系としては、仏性による如来蔵の展開を説く『涅槃経』系の諸経がある。これに対して本経は菩薩を主題とし、その種姓を論じている点において、それらの如来蔵系の諸経典より古い層に属すると考えられ、『宝積経』の「迦葉品」や『維摩経』、または『華嚴経』の「入法界品」や「十地品」の菩薩論や種姓論に近いのではないかと著者はいう。

要するに本経の内容は、「大乘とは住種姓の菩薩が無上菩提へ向けて発心し、菩薩行を行

ずることに他ならない」のであって、これは『瑜伽師地論』の「菩薩地」や『大乘莊嚴経論』の所説と同じであるから、弥勒説のこれらの主張を受けるものであろう。本経は『瑜伽論』的な三乗の立場を如来蔵説によって一乗の方向に修正しようとの意図のもとに、『宝性論』と同様に瑜伽行派に属する人によって作られたもので、早くとも「菩薩地」と同じ頃、おそれれば五世紀でもあり得るとしている。(p.318)

第四章「如来蔵とアーラヤ識」如来蔵説と阿頼耶識説との関係については『宝性論』以前から以後にかけて、極めて広汎であるからこの章では簡単にその展望をなしている。

第一節 概説『宝性論』所引の文献で如来蔵に言及するものには、以上取り扱ったものほかに『大乘莊嚴経論』がある。さらに『莊嚴経論』の基礎となっている『瑜伽論』の「本地分」も直接間接に『宝性論』に影響を与えていると考えられる。さて如来蔵思想と阿頼耶識思想は別個に成立し発展したものであるが、類似共通する点もあるために、『楞伽経』においてはこの両者が融合されることになった。すなわち『楞伽経』は一方では『如来蔵経』『不増不減経』『勝鬘経』からの影響

を受け、また他方で外教のアートマン思想を排除し、一闍提や食肉禁制を強調する点は『涅槃経』系の影響を受けているが、さらに『楞伽経』は自性清浄心（如来蔵）と利那生滅心（阿頼耶識）との関係を論じている。それは『大乘阿毘達磨経』の無始時来界等の偈を、一方では阿頼耶識とし、他方では如来蔵とする両説を融和させることに対して、『宝性論』が果たし得なかったことを、『楞伽経』が融和させたことであって、そこに本経の特色があり、『密嚴経』や『大乘起信論』はこれを受けたものである。

第二節『金光明経』の「分別三身品」唯識説を取り入れ、しかも如来蔵を説く經典としては、『金光明経』の「分別三身品」がある。この品は元来の『金光明経』にはなく、後に挿入されたものである。「分別三身品」を含む『金光明経』としては、漢訳に真諦訳『合部金光明経』、義浄訳『金光明最勝王経』の二部、チベット訳に二部（その中の一つは義浄訳からの重訳）であり、梵文『金光明経』や曇無讖訳の『金光明経』および今一つのチベット訳には「分別三身品」は含まれていない。「分別三身品」による三身説は『宝性論』における三身説に類似しているが、『宝性論』

の三身説は唯識系の『大乘莊嚴經論』によるものである。それは本經の三身説が唯識説に近いものであることを示す。さらに本經には唯識の三相説（思惟分別相、依他起相、成就相）や三心説（起事心、依根本心、根本心）を掲げている。その他、本經には菩薩の四種心（初發心、行道、不退転、一生補処）とか如来の四徳（常我樂淨）とかを説いているが、中には他に見られない本經独特の説もある。

「分別三身品」は教理としてはよくまとまっております、清淨法界と四智と転依によって仏地を説明する『仏地經』に類似対応するけれども、『仏地經』が『大乘莊嚴經論』に基づき、唯識的解釈で一貫しているのに対し、本經は如来蔵説を基本としながら阿頼耶識や三性説へも言及し、教理の寄せ集めの感がある。種の点から見て、『金光明經』の中に「分別三身品」が挿入されたのは、『宝性論』の成立以後ではないかと著者は見ている。

なお著者によれば、真諦三蔵の翻訳書には如来蔵を説く経論が多く、彼は深くこの思想に通達していたと思われるが、その如来蔵説はほとんど『宝性論』に基づくもので、時には原典にないものを彼の解釈として挿入したり

高崎直道『如来蔵思想の形成』（水野）

（『撰大乘論世親釈』、あるいはテキストを自ら作っておきながら、他に仮託したり『仏性論』、いろいろいと疑わしいものがある。經典では『宝性論』の焼直しであることの歴然たる『無上依經』があり、それらの場合からの類推で、この「分別三身品」を含む数品も、翻訳に際してのカラクリがあるかと考えてもみたが、この經には漢訳と無関係にチベット訳もあるし、内容も必ずしも真諦が伝えて主張する如来蔵説のとおりではないので、この場合は忠実なる翻訳者であったと考えられる。そうすると逆に、少くとも『無上依經』に関しては、あるいは他に經作者があったかも知れないと考え直す余地も出て来た。しかし誰が作ったにせよ、この五、六世紀の頃は、論典を土台にした論的な經が盛んに作られたものごとく、まだまだ精査すれば、この時期に属する大乘經典は多くあるのではないかと思われる。（p.347f.）これは著者独自のすばらしい考え方であって、この方面に関しては今後さらに研究せらるべきである。

第三節『勝鬘經』と唯識思想 『勝鬘經』の中には『大乘阿毘達磨經』の偈とされる無始時來界、云々の句を解説するに適当な文があり、『宝性論』は『勝鬘經』のこれらの文で右

の偈を説明している。著者によれば、無始時來界や無明住地等の思想は『勝鬘經』に初めて説かれ、無始時來界は『大乘阿毘達磨經』が採用して阿頼耶識説の根拠となし、無明住地は『成唯識論』が依用するに至った。この点で、『勝鬘經』自身は唯識説と無関係であったとしても、唯識家の方で『勝鬘經』の説を依用したことになる。この点から著者は、『勝鬘經』に説かれているこれらの諸説を筋道の立つた心識説にまとめるためには、どうしても阿頼耶識の設定に落着くことになるであろうとしている。（p.362）

五

第二篇 如来蔵思想前史 第一篇では如来蔵、仏性等の語によって、一切衆生に如来蔵（仏性）があることを説いている文献を中心として、如来蔵思想の形成史が論ぜられたが、第二篇では、如来蔵や仏性の語は出ていないが、「一切衆生悉有仏性」思想の前提となる『法華經』『華嚴經』、さらに如来蔵思想の基本となる空思想を説いている『般若經』が、如来蔵思想の前史をなすものであるから、如来蔵思想と関係ある面から、これらの經典が考察されている。

第一章「如来蔵思想の二源泉」として『般若経』と『法華経』が論ぜられる。第一節『般若経』は『宝性論』に二回ほど引用され、それは無分別智や如来の真如等に関係したものである。そこで本節では『般若経』における法性、法界、法身、真如および三乗と種姓、自性清浄心等が詳しく考察されている。

第二節『法華経』本経には如来蔵や如来種姓については、直接説かれていないが、本経に対する世親の注書『法華経論』の中に如来蔵が説かれているから、まず『法華経論』の内容が検討され、その中に授記説によって如来蔵思想を考えたり、「常不軽菩薩品」に一切衆生悉有仏性の思想があると説いたり、一乗を説明するに十種無上をもってし、その中に如来蔵説や三身説に言及したりするような点がある。これから推して『法華経』自体にも仏性や法身の平等、一切衆生悉有仏性、如来蔵の性浄、涅槃の常、恒、清浄、不変が説かれていると考えられ、『法華経』の一乗説は如来蔵説に他ならないと著者は断定している。(p. 427)

第二章「菩薩と如来種姓(Ⅰ)」ここでは如来蔵思想形成の重要な要素である種姓の問題が、初期の大乘經典について考察される。本

章ではとくに『宝積経』の「迦葉品」と『維摩経』が取り上げられる。

第一節『宝積経・迦葉品』この品は『宝積経』の中で古い成立に属し、代表的なものである。『宝性論』には本経が二回引用されているが、それは如来蔵に直接関係するものではない。本経の主眼は菩薩論にあるが、そこに種姓が論ぜられている。菩薩は如来種姓であるが、菩薩の種姓は心の清浄性である。心については、1心の自相、2心の雑染相、3心の清浄相が観察されるが、この三つは依他起相、遍計所執相、円成実相という唯識の三相に対応するものである。また菩薩の聖性は無名、不生不滅、無垢、涅槃、常樂等とされ、それは後の如来蔵の説明と同じである。因みにこの聖性は『大乘莊嚴経論』では聖性 \equiv 転依 \equiv 心清浄相とされ、その趣旨は本経の中にも見られる。その他、本経には如来蔵思想に関係するものとして、四顛倒と涅槃の四徳、客塵煩惱、本性清浄等の語がある。著者によれば、「迦葉品」の成立は『維摩経』や『華嚴経』よりも早いと見ている。

第二節『維摩経』本経は『宝性論』には直接引用されていないが、『宝性論』が「心染せらるるが故に衆生は雑染せられ、心が浄化せ

られる故に清めらる」としているのは『維摩経』の心垢故衆生垢、心浄故衆生浄に相当するものである。また本経の「如来種姓品」は種姓に関して重要な資料を提供し、さらに本経は自性清浄心と本性清浄、法身、法界、真如等の如来蔵思想に関係したことを多く説いている。最後に著者は『維摩経』と『首楞嚴三昧経』との関係を論じているが、この両経には共通の問題があつて、その成立について、学界では『維摩経』が早いとされているが、著者は『首楞嚴経』の十地説から見て、むしろ順序は逆であろうとしている。なお首楞嚴三昧は『涅槃経』の如来常住説の根拠とされるから、『首楞嚴三昧経』も如来蔵思想の一淵源として重視しなければならないとしてくる。(p. 504)

第三章「菩薩と如来種姓(Ⅱ)」ここでは『華嚴経』が取り扱われている。本経は叢書であるが、元来は個別に成立したものを集めたものである。中でも「入法界品」「十地品」はもっとも有名であり、古い成立に属し、梵文原典も漢訳、チベット訳も存在する。また「如来性起品」も古い成立であり、以上の三品は如来蔵思想の成立に深い関係があるから、この三品が考察される。

第一節「入法界品」ここで如来蔵や仏性に
関係したものととしては「仏種を断ぜずして如
来の家に生ずること」が種々に説かれている
が、ここから『如来蔵経』の思想が発達した
ものと思われる。この品には、華嚴の十地は
なく、大乘の初期の十地としてのいわゆる十
住説が掲げられているから、この品は「十地
品」等よりも古い成立と考えられる。ここ
には如来種姓や如来蔵の語はあるが、それはま
だ後の如来蔵思想における用語とはなってい
ない。(p. 545 f.)

第二節「十地品」本経においては十地と種
姓に関して種々の説があり、それが後の『十
地経論』や『瑜伽師地論』の「菩薩地」等を通
じて『宝性論』に影響している。この品では
十二縁起がすべて一心に依止するという三界
唯心の説とか、縁起の道理を法界とする説と
かがあるが、「十地品」で説く唯心は必ずしも
如来蔵と直接に結び付かず、如来蔵説は唯仏
と関連しているから、唯仏を説く「如来性起
品」がむしろ如来蔵説と直接に連絡している
といえる。

第三節「如来性起品」この品には梵本は残
存しないが、『宝性論』は如来功德の教証とし
て本品を広く依用している。実際に本品は如

高崎直道『如来蔵思想の形成』(水野)

来蔵思想成立のためのもっとも重要な典拠と
なっており、その思想は本品から『智光明莊
嚴経』を経て『宝性論』に至っている。他方
本品は唯識系の『解深密経』にも深く影響を
与えているとされる。(p. 575 f.) 著者によれ
ば「性起品」は「入法界品」を受けたものと
考えられている。

第四章「法身と如来蔵」如来蔵の語は用い
ていないが、『宝性論』がその論の構成にもつ
ともよく利用し、教理上にも密接に関係があ
るため、広義の如来蔵系經典として数えるこ
とのできるものに『宝積経』や『大集経』に
属する諸経、すなわち『智光明莊嚴経』『陀羅
尼自在王経』『宝女経』『海慧所問経』『虚空蔵
所問経』『宝髻経』『無尽意所説経』等があ
る。

第一節『智光明莊嚴経』本経は『宝積経』
関係の独立書で叢書の中に含まれない。『宝性
論』や『大乘莊嚴経論』等に引用され、いわ
ゆる「法身経」として重要である。前述のよ
うに『華嚴経』の「如来性起品」を受けて
『不増不減経』に影響を与えたものと考えら
れる。(p. 632 f.)

第二節『陀羅尼自在王経』本経は『大集経』
の最初の部分をなし、『宝性論』にも引用され

ている。前経と同じく「法身経」に属し、『宝
性論』の七金剛句に相当する仏、法、僧、仏
性、菩提、仏徳、仏業が本経に説かれてい
る。その他、如来蔵関係の学説があるが、著
者によれば、本経は『如来蔵経』より多少古
いか同時頃の成立であろうとされる。(p. 688)

第三節『大集経』の諸品 ここでは前経と
同じく『大集経』の古層に属する諸品が取り
扱われている。それは菩薩と自性清浄心を説
いている部分である。これらの諸品の多くは
菩薩十地説として、華嚴十地説よりも古い十
住説に立っているから、その成立は竜樹以前
に属すると見られる。そこには如来蔵関係の
説としては、自性清浄心に関係のある諸法本
浄、心性本浄、一切衆生本来清浄、法性常住、
客塵煩惱、法界清浄等があり、その他に種姓
と乗、法界と衆生界、法身と如来出現等の説
が見られる。

六

結論 如来蔵思想形成史 第一篇、第二篇
で個々に論ぜられたことが、ここでまとめて
取り扱われている。それは第一には、諸経論が
漢訳された訳経史の面から推して、関連諸経
典の成立順序や特色を概観するものである。

けだしインドの仏教思想や経論の成立発達等は、それらが漢訳された順序とかなりよく一致し、訳経史によってある思想や経論の成立の下限を確定することができるからである。第二には如来蔵思想の素材となった諸概念の展開を眺めることである。以上の両面から、如来蔵系諸経論の系統を図示し、最後にその思想展開に関して、今後論究すべく残されている諸問題を指摘している。

一、如来蔵系經典の訳経史

1 如来蔵系經典群の成立…四世紀

2 唯識説との交渉と論典による組織化…

五—六世紀中頃

3 密教との結合…六世紀以後

二、如来蔵をめぐる諸概念の展開史 ここには、1種姓、2自性清浄心、3界（法界、衆生界、仏性）、4如来と法身、5如来蔵、6秘密・密語・究竟論等の諸概念がまとめて説かれてい

三、残された問題 本書では初期の如来蔵思想形成史が論ぜられ、第二期の学説組織化時代に関しては、唯識思想との交渉はその見通しを述べる程度で、あまり触れられなかった。著者によれば、第二期の重要性はそれ自体のためだけでなく、次代への影響の点にも

ある。それは瑜伽行派との関連影響、チベットに移植後の展開、中国における展開、インドの密教との関係という四つのものであって、著者はこれらの問題点を指摘して本書を終っている。

なお本書には附表として、如来蔵系経論系統図が添付されている。その第一は「如来蔵説に関連する漢訳経論の一覧表」であって、この関係の経論の訳経者とその訳出経論とを年代的に整理して表出されたものである。その第二は「如来蔵関係諸概念展開表」であって、ここには関係経論八十余種を成立年代や性質に従って列挙し、それらの経論が、種姓、心、如来蔵、界、法身等に関し、関説があるか否かを、右の項目をさらに六十余細目に分類して表示したものである。その第三は「如来蔵系諸経論系統図」(p. 769)である。この表は如来蔵系の諸経論が思想的にどのように展開し成立して行ったかを、『阿含経』や『般若経』を根源として、その流れや関係を図示したものである。

以上の三つの表は如来蔵関係の諸経論の関係を一目瞭然たらしめ、極めて便利なものである。その細部にわたっては学者の間に多少の異説があるかも知れないが、著者としての

一貫した見解が示されている。

本書は巻初に著者の関係論文目録、本書の種々なる略号表を掲げ、巻末に内外の学者による如来蔵思想関係の詳しい研究文献目録、索引、英文要旨等を掲げている。

以上簡単に本書を紹介したが、『宝性論』成立に至るまでの如来蔵思想の成立発達の展開を、現存するあらゆる資料を駆使して、全体的に論究している点では、学界において今までに例を見ない業績であり、著者が新しい見解を示している場合も一再ではない。もちろん広大な分野のことであるから、遺漏もあるであろうし、ことに唯識思想とも関連させて如来蔵、仏性の思想を具体的内実的に研究することは、なお今後の学界に残された問題である。とにかく著者のいう初期の如来蔵思想形成史が全面的に探究され、礎石が置かれたことは学界における偉大な功績である。本研究によって著者は東大で学位を受けている。（本文七七九頁、前二二頁、後一〇六頁、別に附表二、春秋社 昭和四九・三月刊 九、〇〇〇円）